

意思決定・表明が難しい重症心身障害者に対する支援 ～重症心身障害者の QOL における専門職の必要性について～

18CC17 松尾 智

I. はじめに

利用者の能力を活かした活動の幅を広げる計画を基に、重症心身障害者の QOL とそれに伴う専門職の必要性について考えていく。

II. 実習先種別・実習期間

医療型障害児入所施設

2019年6月24日～7月23日（うち23日間）

III. 事例紹介

A様 30歳代 女性

1. 家族構成及び入所に到った理由

両親 主介護者である母親が入院したため有期限入所、のちに長期入所に至る。

2. 健康状態

レット症候群 月一回程度の頻度でてんかん発作がある。

3. 日常生活の状況

ADL 全介助 意思決定・表明が難しい 快・不快の表現有り。

4. 1日の過ごし方

日中はフロアにて仰臥位で過ごす。

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

実習を開始した当時、利用者に提供されていた絵本を用いた活動は、聴覚に訴えかけるものが中心であった。実際にそれらの絵本の読み聞かせを行った際に、セリフに対する表出以上に、絵本のページを注視している様子を観察することができた。また、A様は日中、仰臥位で過ごしているがその際、フロアを行き来する職員の姿に注目し、目で追う様子が頻繁に見られるため視覚能力は高いと考えられる。利用者の視覚能力を活かすことで、活動計画の選択肢が増えるのではないかと考える。

2. 介護上の課題

視覚能力を活かした興味・関心のあるものを見つける必要がある

3. 介護目標

長期目標：興味・関心のあるものを見つけ、楽しみを増やすことができる

短期目標：活動計画にない要素を含む絵本を読み、興味・関心のあるものを見つける

V. 実施及び結果

視覚に訴えかける要素のある絵本（とびだす絵本、鏡仕掛けの絵本、小さい絵柄が同一ページに複数ある絵本）を用意し、それぞれの絵本の注目している箇所がどこであるかを観察した。結果、絵本の注目している箇所から、茶色のものに関心が向きやすく、また大きなものよりも小さなもののほうが注目しやすいのではないかと考えられる。

VI. 考察

興味・関心を持てる要素の発見により、今後の活動計画を考える際の幅を広げることができ、利用者の QOL を向上させる助けになったのではないかと考える。

重症心身障害者の QOL は、日常生活の豊かさにあり、それは適度な刺激と能力開発にある。今回の介護計画では意思決定が難しい利用者に対して、介助者が提供する活動を決定して行った。北野¹⁾は、「重度の障害者を「意思決定・表明支援を含む支援を必要とする生活主体者」と述べ、また意思決定・表明支援は「倫理・道德の問題ではなく、支援者が独断で勝手に判断せず、本人の意思決定・表明を支援することを基本とする専門性・プロフェッショナルの問題である」と報告している。重症心身障害者に活動を提供するにあたり、専門職は利用者の理解と観察の視点を併せ、その表出が何であるのかを見極める。また、利用者の能力を考慮してさまざまな活動を試していき、適したものを見つけ最善の利益へ繋げていくことも求められている。利用者の QOL 向上のためには、利用者の最善の利益を提供できる専門職の存在が必須である。

VII. おわりに

今回、ADL のみならず意思決定・表明にも介助を要する利用者に対して、介護職が適したものを選択することの重要性を学ぶ良い機会になったと思う。また障害者に限らず高齢領域においても、利用者の最善の利益を求める姿勢は大切なものであることに変わりはないため、一支援者として利用者に対して真摯に向き合い、利用者の生活を豊かにする手助けができたかと考える。今回はそういった専門職になるための一歩となる介護計画になった。

参考・引用文献

- 1) 北野誠一（2015 年）「ケアからエンパワーメントへ 人を支援することは意思決定を支援すること」ミネルヴァ書房 p.161、162
- 2) 浅倉次男（2006 年）「重症心身障害児のトータルケア 新しい発達支援の方向性を求めて」ヘルス出版 p.69
- 3) 篠本 耕二（2014 年）「意思決定困難な重度知的障害者の「代行決定」障害者家族会による成年後見事務からの示唆」ブイツーソリューション p.190